

良縁結ぶは神ならず

装幀
鈴響雪冬

目次

痕跡を見つけて	4
不思議な縁を結んで	8
想い出を見つけて	22
きっかけで結んで	24
不審者を見つけて	44
心を結んで	46
歴史を見つけて	62
人を結んで	64
心の在処を見つけて	78

作りかけの御守りに、袋詰めの中で止まっている破魔矢、〈日本の四季と祭〉というタイトルの本に縫い針マジックにボールペン、鉛筆、はさみ、模造紙、何に使用おうとしているか分からない針金とペンチといった雑木林が目の前には広がっている。いつの間にはここは鎮守の森になったのだろうか。

「楓さんは本当に片づけが苦手なんですね…」
あんなに掃除は丁寧なのに、と追加で呟いて、一応のフオーはする。

そんな混沌を浄化しようと、上質な絹で裏ごししたかのような光が空から降り注いでいた。夏の日差しとは違うそれを社務所に導くのは、完成した当時の華やかさこそ失ったものの、まだその存在感を保持している…いや、年を経ることで、ますます力強くなった木の窓枠だった。実家や前に住んでいたアパートの樹脂の窓枠は気がついてたら表面がぼろぼろになっていたけど、ここのそれは塗

装こそ剥がれていても、むしろそれによって風格が増し、なにか得体の知れない力を纏っているかのように見える……とはさすがに買いかぶりすぎだろうか。

もう一歩足を進めると、ギイ、と、しわがれた鳴き声が床から響いてくる。その音だつて、古くさいというよりは、歴史や風格を彩る一つの重要な要素なのだ。最近はこの音を聞くことも減ってきたと、手伝いにきてくれたおばあちゃんが言っていたのが気になって知り合いの宮大工に聞いてみたら、近頃の家は接着剤でフローリングを固定してしまうから、こういう音とは無縁なのだという。釘で床板を打ち付ける、昔ながらの建物ならではという所だろうか。

にもかかわらず。通ってきた道を振り返ると、さっきの混沌とそれを育むスチール製の事務机が林立し、よく言えば古今東西、悪く言えばまとまりの無い空間が広がっている。

そんな机に寄りかかりながら、どういふ経緯でこれが社務所にあるかを夢想する。まあ、おおよそ氏子の会社であまったとか、新しい机に入れ替えるからとか、そういう理由で献納されたのだろう。応接室に置かれた数々の悪趣味な飾り物といい、どこか先々代の宮司はズレているところがあるような気がする。まあ、この机に限っては先々代の時代に運び込まれたとは限らないのだけど。

そんな風景から視線を外し、外を見据えながら、既に楓さんによって開かれていたであろう窓口を兼ねている窓の前まで歩いていくと、すぐ近くの木に留まっていた雀が声を上げて飛び立っていった。雀の休憩所になっていた銀杏はいつもと変わりなくそこに立っている。

「…はあ」

意識しないようにと机の上を見てみたり、窓枠そのものや窓の外に意識して視線を向けてたりしていたのにもかわらず、目は自然とそこに向けられてしまう。

たとえて言うなら、出汁を取り忘れた味噌汁のような、ミントを乗せ忘れたレアチーズケーキのような、漠然とした寂しき、物足りなさ。目の前にある木も、それを絵画に変えてしまう窓枠も、いつもと変わらずそこにある

のに、何か今一つ足りないような違和感。その正体はすでにわかつている。

いないのだ。

窓際に置いてあった、近所の親子が作って持ってきてくれた、ぬいぐるみが。

居なくなつてからもう二ヶ月は悠に経つだろうか。幸いと言つてはなんだが、その親子はそれを最後にまだ参拝に来てないから気づかれていない。でも、今度来た時に隠し通せる自信は無かつた。

「おはようございます、菱沼さん」

私の心配をよそに、背中から元気な声が飛んでくる。

「おはよう、楓さん」

「何かお探ですか？」

「いや、今頃、ここに置いてあったぬいぐるみはどうしているかなって」

「それって、私に来る前の話でしたよね」

楓さんはさつきまでの元気が嘘のようにしよげると、「そうですね……、なんかの拍子に下に落ちて、犬や猫に持って行かれたのかもしれないね。または、誰かが持つていったか……こつちはあまり考えたくないですけ